

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	より良き臨床医育成のために
別タイトル	Center for Clinical Training and Education: For purposes of bringing up the better clinicians
作成者(著者)	並木, 温
公開者	東邦大学医学会
発行日	2019.03.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 66(1). p.95 96.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	教室(診療科)紹介
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2018_052
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD67537038

教室(診療科)紹介(112)

より良き臨床医育成のために

卒後臨床研修/生涯教育センター

教授(センター長) : 並木 温
 助教(副センター長) : 原 文彦

卒後臨床研修/生涯教育センターの軌跡と使命

わが国における卒前および卒後教育において、現在大きな変革の流れが進行しつつあります。2001年の「医学教育モデル・コア・カリキュラム」策定をその嚆矢としますが、国としての制度改革が最初に行われたのが2004年のマッチングシステムを導入した「初期臨床研修制度」の改革です。この2004年を境として、わが国の医学教育に大きな変化が生じることとなりました。すなわち医学部のみならず臨床研修病院での臨床現場における教育性が見直され、多

くの臨床研修病院に教育担当部門が開設されました。全国の医学部においては教育専任部門が新設あるいは改変されて卒後教育に対応すると同時に、この流れがやがては卒前教育の充実につながって行くこととなりました。本学においては医学部と法人における議論を経て、医療センター3病院の卒後教育を下支えする部署として2003年に医学部に卒後臨床研修/生涯教育センター(以下研修センター)が発足し、現在に至っております。しかしその名前が示す通り、単に卒後臨床研修の充実を図るのみならず、東邦大学医学部の関係者が生涯にわたって学び続けることのできる環境を整備することが、研修センターの最大のミッションです。

業務内容

現在の研修センターの主たる業務内容は多岐にわたりますが、1) 東邦大学医療センター3病院における初期臨床研修に関する業務、2) 他病院で初期研修を行う本学医学部卒業生に関する業務、3) 3病院における(初期研修修了後の)後期臨床研修に関する業務、4) 初期・後期研修医(レジデント、シニア・レジデント等)の管理に関する業務、5) 3病院における無料職業紹介に関する業務、に大別されます。初期および後期臨床研修の実際は3病院で行われており、各病院の教育担当部署、つまり大森病院教育企画管理部(責任者: 島田長人先生)、大橋病院教育支援管理部(責任者: 高橋 啓先生)、佐倉病院教育支援室(責任者: 龍野一郎先



センター長(中央)、副センター長(左)と事務局責任者の古内 茂課長(右)

生)と密に情報を交換しながら、法人本部や医学部、3病院各診療科、大森学事部、3病院事務部、さらには中央官庁(厚生労働省、文部科学省)や多くの教育関連病院と調整しつつ、物事を前に進めるように努力しております。初代研修センター長の中野弘一先生は「われわれは遊軍である」と表現されましたが、守備範囲にこだわることなく必要とされる場面に出向いて、黒子に徹して組織の潤滑油として活動することが、研修センターとして最もあるべき姿であると感じております。

今後の活動

初期臨床研修は、2020年度に大きな制度改革が予定されております。また初期臨床研修修了後の後期臨床研修(専門研修)も、今後まだまだどうなるのか予断を許しません。2018年4月から日本専門医機構を中心としてスタート

いたしました。卒前教育に関しても、学修成果基盤型教育に準拠した教育、また診療参加型臨床実習の充実を目指した改革が進行中です。今後Student Doctorによる診療参加型臨床実習が実質化されれば、初期臨床研修は1年間という時代が来るかもしれません。これから、卒前教育、初期研修、後期研修のそれぞれの改革がお互いに良い影響を与え合い、全体の底上げにつながって行くことが期待されております。「卒前・卒後のシームレスな連携」という言葉が良く聞かれます。教育を考えることは、その組織の将来を考えることです。研修センターとしても卒後のみならず卒前教育の変化にも十分にアンテナを張りつつ、東邦大学医学部におけるより良き臨床医育成のために何ができるのか、考え続けて行く所存です。

(並木 温)

DOI : 10.14994/tohoigaku.2018-052